

建文帝の諡号について (5)

Evaluating Ming Emperor Jianwen
from the Perspective of his Posthumous Title (5)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

萬曆二十一年（一五九三）九月乙卯（四日）に、陳于陞（字は元忠、号は玉壘。四川南充の人。隆慶二年戊辰科（一五六八）二甲七名の進士）は正史の編纂を願ひ出る。なお、萬曆『實錄』にも、同じ内容の陳于陞の疏が掲載されているが、『國榘』所引のものがより明晰に要約しているようにとれるので、拙稿では『國榘』から引用する。

[萬曆二十一年九月乙卯（四日）]、署詹事府事禮部尚書の陳于陞 本朝の正史を修めんことを請う。略に曰く、史家の體に史家の體に二有り。曰く、「編年」。曰く「紀・表・志・傳」。宋の建隆 [年間（九六〇年～九六三年）] の後より、編年の史を「日曆」と曰う。即ち百司の奏對する事實を采る所を「時政記」と爲す。類して「實錄」と爲す。其の紀・表・志・傳を「正史」と曰う。[それは] ^{たとえ}如ば、眞宗の [大中] 祥符の間（一〇〇八年～一〇一六年）に王旦等 太祖・太宗兩朝の「正史」を撰し進め、紀六卷・志五十五卷・列傳五十九卷と爲す。仁宗の天聖の間（一〇二三年～一〇三二年）に呂夷簡等 眞宗朝を増入し、「三朝國史」と曰い、紀十卷・志六十卷・列傳八十卷と爲す。此外、又た祖宗の弘謨・要政を輯録し、分門・別類し、以て御覽に便にする有り。[また] 帝の學に裨する者有り。王曾の「三朝寶訓」三十卷と范祖禹の撰する「仁皇訓典」六卷の如きは、聖孝より愛物に至るまで、凡そ三百十七條、以て邇英 [閣] の進講に備う。我朝の功業法制は、事事 超越す。而れども列聖の「實錄」は、之を金匱石室に藏す。

〔これは〕宋の世の「編年」・「實錄」の體に似たり。之を備史と謂う可し。
 〔しかし〕未だ正史と謂わず。『大明會典』に至れば、屢しば頒布を請うも、
 廟堂の謨謀冊告なり。臣工の議論の文章 ^{これ}焉に與からず。則ち本朝の正史
 は、今日に在りても亟やかに圖らざる可からざるなり。章 所司に下す(『國
 榷』卷七十六・「萬曆二十一年九月乙卯」条・四七〇九頁)。

明朝には「實錄」は存在するが、「正史」というものではない。『大明會典』も
 しばしば頒布されてはいるが、政府の法令制度を集めたものであり、群臣百官
 の議論は、載せられていない。したがって、「正史」の編纂はすみやかに行わ
 なければならないものである、と陳于陞が提案した。そして、それが、管轄す
 る部署へ送られたというのである。

この提案をうけて、翌年の萬曆二十二年(一五九四)三月十二日に、王錫爵(字
 は元馭、号は荊石。江蘇太倉の人。嘉靖四十一年二年壬戌科(一五六二)一甲
 二名の進士)などがつぎのように述べる。

〔萬曆二十二年三月〕十二日庚寅、大學士の王錫爵等 題して「恭しく聖
 明を請い、儒臣に勅し、書局を開き、本朝の正史を纂修させ、以て萬世に
 垂らさん」事の為にす。……萬曆二十一年九月二十三日、^う奉けたる聖旨に
 「〔陳于陞の〕議に依りて行なえ、此れを欽しめ、欽しみて遵え」、と。手
 本 〔内〕閣に到り、臣等 見て議し得たるに、正史の纂修は創議(はじ
 めての提案)と称すると雖も、^こ粵れ^{かんが}先代を稽るに、咸な舊章有り。漢史の
 如きは馬(司馬遷)・班(固)の二氏に成り、宋史は真[宗]・仁[宗]の
 二帝に詳し。凡そ皆な本朝(その当時の王朝)の史記・本朝(その当時の
 王朝)の事故を以てするは、聞見 真にして傳信(『穀梁傳』桓公五年に
 「『春秋』之義、信以傳信、疑以傳疑」) 遠ければなり。明 興りて二百余
 年、治化 ^{きわめ} ^{さかん}慕て隆にして、遠く千古を超ゆ。〔しかし〕正史 未だ脩わらず。
 後嗣 何をか觀(觀)んや。切に惟うに制書(皇帝の命令)の紀載の大な
 る者は、累朝の「實錄」・「大明會典」の二書に若くは無し。^し顧うに「實錄」
 は^た惟だ編年に取りて、事蹟は相い聯貫せず、「會典」は^た止だ條例を載せて、

議論は未だ詳収するに及ばず。各々体裁有るも、●（一字不明）史法に非ず。即ち●（一字不明）一事の顛末を考う・一人の始終を求むに、浩瀚にして周くし難（難）く、搜尋 易からず。[そういうわけなので] 乃ち家乗・野紀は途説（根拠のない話）^{かすめと}を勤りて訛を傳えしむ。名徳・嘉猷 道文を散じて顯ならず。誠に闕典と為す。請う所の前項の「正史」の一節に據り、委ねて宜しく時に及びて纂修し、以て不朽の傳を垂らし、以て右文の治を彰かにすべし、と。^{すべて}所有の^{まさ}合に行なうべきの事宜は、臣等 謹みて酌議し後に開列す。其の未だ盡さざる者有れば、^{まさ}容に陸續と具題し、伏して聖明の裁定を乞い、施行せん。^{なぜなら、こ}縁ば係れ本朝の正史を修むるを議するの事理なれば、未だ敢えて擅にせず。便ち謹みて題もて旨を請う……（天津図書館蔵明抄本『萬曆起居注』七冊・四〇四頁～四〇七頁・「萬曆二十二年三月十二日庚寅」条：「中国公共図書館古籍文献珍本匯刊・史部」新華書店二〇〇一年刊）。

明は興ってから二百年あまりになり、その治世はきわめて盛んで、これまでのものを超越している。なのに「正史」は備わっていない。後の人は何を参考にすればよいのだろうか。明には、それぞれの皇帝の「實録」と『大明會典』があるが、不十分である。そこで、提案のように「正史」を編纂して、不朽のものとし、文を尊ぶの治世であることをあきらかにすべきである。そして、編纂のためにしておくべきこととして「請勅」・「開館」・「設官」・「聚書」・「分任」・「責成」を挙げるが、僭越に過ぎるので、神宗萬曆帝の裁定を待つ、という。

なお、「正史」編纂のためにしておくべきこととは、明抄本『萬曆起居注』によれば以下のようなことである。

請勅：編纂にあたって特に勅諭を下してもらいたい

開館：編纂官をどの建物に配置するか

設官：それぞれがどのような仕事をするか

聚書：関係する書籍を集める方法について

分任：何から執筆するか。具体的には、志・本紀を先にし、年表がそれに

続き、列傳を最後にしたい

責成：責任をもって任務を完成することの確認

このことは、神宗『實錄』に、

〔萬曆二十二年三月〕庚寅（十二日）、禮部尚書の陳于陞 先〔の萬曆二十一年九月乙卯（四日）〕に本朝の正史を纂修せんことを以て請う。之を允す。是に于いて、閣臣の王錫爵等 事宜を條上す。〔具体的には〕一請勅、一開館、一設官、一聚書、一分任、一責成なり。旨 禮部に下る（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百七十一・「萬曆二十二年三月庚寅」条）。

とあり、『國榷』に、

庚寅（十二日）、閣臣 陳于陞の〔萬曆二十一年九月乙卯（四日）に〕史を修むを以て事宜を條上（文書を用意して陳述する）す。〔具体的には〕請敕・開館・設官・聚書・分任・責成なり。旨 禮部に下る（『國榷』卷七十六・「神宗萬曆二十二年三月庚寅」条・四七二四頁）。

と節略して引用されている。

そして、三月二十二日に王錫爵などが、副總裁以下の人事を願いでた。

〔萬曆二十二年三月〕二十二日庚子、大學士の王錫爵等 題もて「本朝の正史を纂脩する」事の為にす。^{ここに}茲者欽しみて奉けたる勅諭もて前項の書籍を纂修せんとするに、臣等に命じて總裁官に充つ。〔この〕欽遵（皇帝の旨意に従う）を除くの外、^{すべて}所有の副總裁以下の各官は^{まさ}合行に題もて請い以て聖裁を候たん。査し得たり、見（現）任掌詹事府事礼部尚書の陳于陞・起用南京礼部尚書の沈一貫・原任詹事府詹事兼翰林院侍讀李（學）侍の丁憂もて休暇し回籍せる馮琦 俱に宜しく副總裁の官に允つべし。〔その〕内の陳于陞の日講教習は舊に照らし、沈一貫は礼部尚書協理詹事府事に量改し、劉虞夔・馮琦は俱に催取を行いて京に赴かしむ。以上の四員は其の日逐 館に在りて専ら纂修の事務を管せしむ……（明抄本『萬曆起居注』七冊・四二一頁～四二二頁・「萬曆二十二年三月二十二日庚子」条）。

この提案によると、陳于陞・沈一貫・劉虞夔・馮琦の四人が中心となって「正史」を編纂したようにとれる。

三日後の三月二十五日に、神宗萬曆帝は、この「正史」の編纂を命じたのは「法祖右文の至意」に備えるためであるという勅諭を出している。ただ、ここで神宗萬曆帝が、「副總裁及び纂修等官職名」は「開具（開列）して奏聞せよ」と述べていることと、その二日前の王錫爵などの人事の提案とは、記録に混乱があったのか時間が前後しているように見える。

〔萬曆二十二年三月〕癸卯（二十五日）、大學士の王錫爵等に勅諭して曰く、朕（神宗萬曆帝）毎に前史を覽て、其の治亂得失の故を觀るに、懼然として興思し、親から見るが若し。當時の行事 後の今を視るは、猶お今の昔を視るがごとし。乃ち知る史書は、傳信（穀梁傳・桓公五年に『春秋』之義、信以傳信、疑以傳疑）にして、其の世教に關繫する所の者は、最も鉅にして且つ要なり。洪いに惟れ我が皇祖 開天垂統し、貽謀は千古を超越し、列聖 相い承けて重熙累洽（太平が続く）、太平の治は赫として二百餘年に垂んとす。其の茂烈鴻功・典章法度と夫の名賢高節の渺論竝議（宏論）は、書するに勝う可からざる有り。寶錄鴻編の金匱石室に藏する者は、炳なること日星の如しと雖も、然れども或いは體は編年を襲い、或いは事は掌故を存し、一代の綸（天子のことば）・實蹟 尚お多く缺けて、未だ備わらず。何を以て「後人を啓き^{たす}佑け」（『書經』君牙）て、千萬世に昭垂せんや。茲に特に卿等に命じ、俱に總裁官に充つ。査し照らすに該部

題もて覆す「本朝の正史を纂修す」の事理は、日を擇びて開館し、博く儒臣を選び、古史の舊體の分類に照依し、派して撰刻し基（ひとまわり）ごとに完稿（脱稿）して具に送り、卿等 商定裁酌せよ。〔そして〕卿等

宜しく各官を督率し、悉心考究して編輯成書し、務めて隱括を求め、議論を遺さず、至當（適正）以て一代不刊の典を成し、用って朕の法祖右文の至意に副えよ。其の副總裁及び纂修等の官職名と、併せて合行（行なうべき）事宜は、還た陸續と開具（開列）して奏聞せよ（『大明神宗範天合

道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百七十一・「萬曆二十二年三月癸卯」条)。

『國榷』も、三月二十五日に、正史編纂の命令が出され、二十六日に、編纂官の人選が提出されたという。

〔萬曆二十二年三月〕癸卯（二十五日）、敕もて正史を修む。内閣に諭して詞臣を選びて分任さす。

〔萬曆二十二年三月〕甲辰（二十六日）、禮部尙書の陳于陞・南京禮部尙書の沈一貫・詹事の劉虞夔・少詹事の馮琦 正史副總裁に充つ……王錫爵

〔以下のように〕謂えらく。翰林の各官 尙お多し。宜しく吏部もて催取して京に赴かせよ。海内の博學洽聞の士・或いは別署に官たるもの・或いは外僚に淹^{とど}まるものに至れば、臣等 其の文行兼ねて優れる者をを搜し、品流を論ぜず、京職に改め入館せしめよ。或いは山林隱逸の文行の取る可きは、吏部をして訪用せしむ。〔そして〕内府の藏書を出だす。紀・表を先にし、年表を次にし、列傳を次にす。限るに年月を以てし、各々總裁に送れ。纂修官は給暇を充差すること母れ、と。上（神宗萬曆帝）之を是とす（『國榷』卷七十六・「神宗萬曆二十二年三月癸卯・甲辰」条・四七二五頁～四七二六頁）。

このようにして、萬曆二十二年（一五九四）八月二日に、「正史」編纂所が開館した。明抄本『萬曆起居注』には、

是の日（萬曆二十二年八月丁未（二日））、本朝の正史を纂修するを以て巳時に開館す（明抄本『萬曆起居注』七冊・六三八頁・「萬曆二十二年八月丁未」条）。

とあり、萬曆「實錄」には、

是の日（萬曆二十二年八月二日）、開館して本朝の正史を纂修す（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百七十六・「萬曆二十二年八月丁未」条）。

とあり、『國榷』にも、

〔萬曆二十二年八月〕丁未(二日), 開館して正史を修む(『國權』卷七十六・「神宗萬曆二十二年八月丁未」条・四七三三頁)。

とある。

この正史を編纂する過程で、建文帝の年号が問題となり、萬曆二十三年(一五九五)の楊天民や范謙などの提案につながったのであろう。これらの提案に対して、陳于陞などはつぎのようにいう。

〔萬曆二十三年九月〕十一日庚辰、大學士の趙志臯・張位・陳于陞・沈一貫……給事中の楊天民・御史の牛應元の疏もて「纂修する正史の内に于いて建文の年號^もを將^もって議復せんことを乞う」を〔以下のように〕覆(回答)す。臣等 竊^{おも}かに惟^{おも}うに、建文の年號は以て湮^{おも}没し難し。屢^{おも}しば經^{おも}たる先朝の諸臣の條議は諸書の紀載に見るに及ぶ。皆な當に復すべしと謂^{おも}えり。但だ循^{おも}因^{おも} 日に久しく、尚^{おも}未だ舉行されず。茲に正史を纂修するの時に當り、言官 因^{おも}りて此の議有り。據^{おも}る所の禮部の覆疏は、考訂詳明にして、議論正大なり。宜しく允從し以て一代の傳信の典を昭かにし、以て天下人心の公に協^{おも}うべきに似たり。〔しかし〕臣等 未だ敢えて擅^{おも}に便^{おも}ぜず。謹みて僭^{おも}かに票帖一道を擬し、恭しく御覽に進め、伏して聖明の裁定施行を乞^{おも}わん。謹みて具題し以て聞^{おも}す(明抄本『萬曆起居注』八冊・二七二頁～二七四頁・「萬曆二十三年九月十一日」条)。

正史における「建文」の年号の取り扱いを再検討してもらいたいという楊天民・牛應元の提案に対して、「建文」の年号は抹殺できないし、これまで復活が提案されてきたが、そのままになっていた。いま、正史を編纂するにあたって、それを認めたいと考える。だが、臣下としては勝手に決断することはできないので、神宗萬曆帝の聖断を仰ぎたい、というのである。

また、萬曆「實錄」にも、節略して、

〔萬曆二十三年九月〕庚辰(十一日)、大學士の趙志臯等〔以下のように〕言う、禮部に發し下さるを蒙^{おも}るの一本の〔提案の〕内、給事中の楊天民・御史の牛應元の疏を覆して「正史を纂修するの内に建文の年號を議復する

を議するを乞う」は、覆疏に考訂 詳明にして、議論 正大なり。宜しく准從すべきに似たり。謹しみて票帖を擬し呈覽す（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百八十九・「萬曆二十三年九月庚辰」条）。

とある。

「建文」の年号の復活を認めるというのであるが具体的には、どうしたのかよくわからない。だが、すでに引用した楊天民の疏に、

萬曆二十三年（一五九五）七月初四日、具題（上奏）す。本月初七日、聖旨を奉じ、禮部 知道せり。九月十六日、該禮部 覆す。十八日、奉^うけたる聖旨に建文の事蹟は着して太祖高皇帝紀の末に載せ、仍お其の年號を存せしめよ、と（『楊全甫諫草』卷一・七葉・「累朝闕典究竟難湮懇乞聖明及時修舉以成祖德以光正史」疏）。

とあることからすると、建文帝の事績は太祖洪武帝紀の最後に記載し、そこにおいて「建文」の年号を用いるように、と認められたというのであろう。

また、九月十六日に出された范謙らの提案になると、太祖洪武帝の「實錄」の洪武三十二年より三十五年、つまり建文帝の治世の時期の事跡を選び出して、それに「建文」の年号をつけ編纂して「少帝本紀」として献上すべきだ、というものになる。

〔萬曆二十三年九月十六日〕禮官の范謙等 覆奏するに、……願わくは此の纂修の時に及び、史局に命じて「高廟實錄」中に于いて、洪武三十二年より三十五年に逮ぶの遺事を摘し、復して建文の年號を稱し、輯して「少帝本紀」と為し、奏上せん、と（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百八十九・「萬曆二十三年九月乙酉（十六日）」条）。

この提案のように「本紀」（「少帝」という称号については以下で検討する）となると、建文帝のとりあつかいは、明朝の歴代の皇帝と同等になる。

だが実際は、呉道南（字は會甫，諡は文恪。江西崇仁の人。萬曆十七年己丑

科（一五八九）一甲二名の進士）がいうように、建文帝や景泰帝の位號は復活させて、「實錄」に付記されるものの、その「本紀」作成は待ったがかかったようである。

今、其の款目 具さに在りて、略鏡す可きなり。帝の本紀・皇后の本紀あり。建文・景泰の位號は、題を経て復し、「實錄」に附載すること有と雖も、[建文帝・景泰帝の] 專紀は待つ有り（『呉文恪公文集』卷之二・二葉・「正史議」）。

また、明末から清初を生きた談遷（字は孺木。浙江海寧の人。明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・順治十四年〔一六五七〕）は、『棗林雜俎』において、南充陳文憲（陳于陞） 相國たりし時、正史を修む。列聖本紀・皇后本紀あり。建文・景泰は實錄を以て專紀に附載し、待つ有り……（『棗林雜俎』聖集・藝簣・「陳于陞修史」条）。

という。談遷は、建文帝の本紀は「實錄」作成で代替され、太祖本紀に付載されたと考えるのである。しかし、本紀に「實錄」を附記するのは、体裁上考えにくい。やはり、呉道南のいうように、「實錄」に附載するようになったと考えるのがよいのではないかと思う。すると、萬曆二十三年（一五九五）九月十六日の萬曆『實錄』に、

詔もて建文の事蹟を以て太祖高皇帝の末に附して、其の年號を存す（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百八十九・「萬曆二十三年九月乙酉」条）。

とあるのは、「建文」の年号を冠した建文帝の「實錄」を編纂して、「太祖實錄」に附記せよということなのではないだろうか。

さて、このままであったなら、建文帝の「實錄」が編纂され、「建文」の年号は復活するはずであった。

ところが、二年後の萬曆二十五年（一五九七）六月二十四日になって、張位（字は明成、号は洪陽。江西南昌の人。隆慶二年戊辰科（一五六八）二甲三十一名の進士）などが、「正史」編纂の中止を願いでた。編纂所とされた皇極門の左

右の兩廊が災害を受けたためであるというのである。萬曆『實錄』は、つぎのよういう。

〔萬曆二十五年六月癸未〕大學士の張位等 暫らく正史の纂修の事務を停めんことを擬す。皇極門の左右の兩廊 災を被るを以ての故なり（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三百十一・「萬曆二十五年六月癸未」条）。

『國權』も同様に述べる。

癸未（二十四日）、張位等 暫らく正史を纂修するを停するを請う。是れより先、皇極門の兩廡に開局するも、被燬すればなり……（『國權』卷七十七・「神宗萬曆二十五年六月癸未」条・四七九八頁）。

この条に談遷は、つぎのようなコメントを付している。

談遷 曰く、往（むかし）正史を纂修する時、材を玉堂（翰林院：宮中）に取り、餘は及ぶ無し。〔そのため〕其の簡用（取捨選択）已に陋る。^{せばま}又た陳文憲（陳于陞）館舎を捐て、主議（取り決め）は虚にして、人無し。柏梁（宮殿）の災に因り、之に乗じて以て筆を輟（中断）す。余 嘗て典禮・河渠・兵制の諸志及び本紀・列傳を読み、間に數首を見るに、蕪率（雑然とするとところ）多く、之を望むに靡靡然（秩序がない）たり。業に肇筆は彙類し以て従う。或いは異才 出で、之を潤色すれば、亦た幸いなりと云うなり。俟焉として閣を廢し、諸稿 散佚す。抑そも新建（張位）の輩

其の成るを妬み、我より始まらずと謂うか、と（『國權』卷七十七・「神宗萬曆二十五年六月癸未」条・四七九八頁）。

「正史」を編纂するのに、宮中の史料のみによったので、材料に限りがあった。さらに、陳于陞が萬曆二十四年（一五九六）冬に亡くなったため、責任をもって取り決める人はいなくなってしまった。そのため、宮殿の災害を理由に編纂事業を中断してしまった。私、談遷がその原稿を読んだが、雑然として系統だっていなかった。そもそも、張位などの人たちが、「正史」の出来上がるのを妬んだためだ、という。

また、『棗林雜俎』においても同様に談遷はいう。

……[この正史の] 志 初めに畢り。丁酉（萬曆二十五年〔一五九七〕）
列傳を擬す。[萬曆二十五年（一五九七）] 六月三〔日〕に殿災ありて業を
輟（中断）す。又た南充（陳于陞：南充は出身地）は前に卒し、四明の沈
一貫は以て爲意（主張）せず、其の始めの議を非とするなり（『棗林雜俎』
聖集・藝簞・「陳于陞修史」条）。

「正史」の志の部分が最初に完成し、萬曆二十五年（一五九七）には、列傳に
取り掛かった。だが、その年の六月三日に編纂所にあてていた宮殿が災害にあ
い、事業が中断した。さらに、陳于陞が亡くなり、沈一貫は継続を主張せず、「正
史」編纂を続けることをの提案を否定したという。

朱彝尊（字は錫鬯，号は竹垞。浙江秀水の人。崇禎二年〔一六二九〕～康熙
四十八年〔一七〇九〕。康熙十八年己未科博學鴻儒（一六七九）の第一等十七名）
の『靜志居詩話』には、

……萬曆甲午（萬曆二十二年〔一五九四〕），大學士の陳文憲公（陳于陞）
の請を允し，工部に詔して館を葺し，禮部の尙書より下，同詹事・春坊・
司經局・翰林の諸臣 門を分かちて事を授く。先づ太傅の文恪公（朱國祚：
字は兆隆。秀水の人。萬曆十一年癸未科（一五八三）一甲一名の進士）
孝宗大紀を領修し，吳文恪公（吳道南）河渠志を領修す。今，集中（『吳
文恪公文集』）に載す。惜しむらくは文憲公（陳于陞） 逝き，竟に其の事
を獲ず……（『靜志居詩話』 卷十六・「吳道南」条）。

とある。

さらに、『明史』陳于陞傳によれば、

[萬曆] 二十四年冬，[陳于陞は] 病みて位に卒す。史も亦た竟に罷む（『明
史』 卷一百十七・列傳一百五・陳于陞傳）。

という。この「史」は、おそらくいま検討してきた「正史」を意味し、その編
纂作業が、ここで中止となったことを示していると考えられる。そのため、談
遷が「抑そも陳相國（陳于陞） 捐館の後，同正史 之を佚するなり」と言っ

たのではないか。

ただし、萬曆二十九年（一六〇一）に提出された沈子木の提案には、「建文」の年号の復活については、触れられていないので、この頃には、まだ編纂が続けられていた可能性がある。しかし、萬曆三十八年（一六一〇）九月九日に、劉曰梧が疏を提出する時には、取りやめになっていたのではないだろうか。なぜならば、劉曰梧は「建文」の年号の復活を求めているからである。

先にも検討したが、「建文の年號を復す」というのは、「建文」の年号を用いた「實錄」を作成することで、「建文」の年号を復活させるというものであった。「正史」の編纂、つまり建文帝についていうと建文「實錄」の編纂が取りやめとなると、「建文」の年号は、復活したことになる。復活の決定はなされたものの、実質的には「建文」の年号は、復活しなかったことになるのである。そのため、劉曰梧が年号の復活を求めたのではないだろうか。

以下で検討するが、天啓年間にも「建文」の年号の復活は、提案されている。なお、すでに検討した范謙らの提案に、「建文帝」のことを「少帝」としている。

……成祖（永樂帝）の即位の初め、建文を稱して少帝と為し、在位の諸臣の舊惡を念わざるの旨有り……願わくは此の纂修の時に及び、史局に命じて「高廟實錄」中に于いて、洪武三十二年より三十五年に逮ぶの遺事を摘して、復た「建文」の年號を稱し、輯して「少帝本紀」と為し、奏上せん、と（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百八十九・「萬曆二十三年九月乙酉」条）。

永樂帝が、即位するとすぐに建文帝を「少帝」といった。そこからであろうが、編纂中の「正史」で、建文帝を「少帝」として「本紀」を作ってもらいたいという提案もなされたのである。

そもそも、「少帝」といわれる皇帝は、管見の及ぶところ、つぎの六人である。

前漢の少帝恭（在位 187B.C. ～ 184 B.C.）第三代皇帝

前漢の少帝弘（在位 183B.C. ～ 180 B.C.）第四代皇帝

後漢の少帝（在位 125）第七代皇帝（北郷侯）

後漢の少帝（在位 189）第十三代皇帝（弘農王）

南朝宋の少帝（在位 422 ～ 424）第二代皇帝

五代後晉の少帝（在位 942 ～ 946）第二代皇帝：『新五代史』では、「出帝」「諡法解」などには、「少」字は、見当たらない。諡には用いない文字であるようだ。ただし、劉知幾（字は子元。唐・龍翔元年〔六六一〕～唐・開元九年〔七二一〕）の『史通』に、つぎのようにいう。

夫れ歴觀するに古より、稱謂は同じからず、情に縁りて作られ、本より定准無し。諸侯の諡無きが若き者に至れば、戰國 已上 之を「今王」と謂う。天子の黜けらるる者は、魏・晉已後 之を「少帝」と謂う……（『史通』内篇・稱謂）。

魏・晉以後は、天子の位からしりぞけられた者を「少帝」というのだとする。

また、唐の睿宗は、玄宗に位を譲ったため「少帝」と『舊唐書』に記載され、北宋の欽宗は、金によって北方に拉致されたのちに「少帝」と記されている。

すると「少」字は、位を全うできなかった皇帝に贈られた文字であったと推測できる。

⑧天啓年間

天啓三年（一六二三）四月十四日に、羅尚忠（直隸青陽の人。萬曆四十一年癸丑科（一六一三）三甲百五十五名の進士）が、建文の年號と廟での祭祀とを請願し、あわせて当時の殉節の臣を表彰することを願い出た。しかし、熹宗天啓帝は、建文の臣の表彰は、すでになされているので、紛紜と提案するなといった。

戸科給事中の羅尚忠 上疏して建文の年號・廟祀を追復せんことを請い、仍りて當年の事に死するの諸臣を表章せんことを乞う。上 謂う、諸臣は已經に皇祖が建祠し表忠す。必ずしも紛紜と陳奏せず、と（『大明熹宗達天闢道敦孝篤友章文襄武靖穆莊勤愍皇帝實錄』卷之三十三・天啓三年四月）。

『罪惟録』（帝紀卷之十六・熹宗哲皇帝）は、この記事を六月に掛け、「廟祀

を追復」については、省いている。

〔天啓三年〕六月……戸科の羅尚忠 上疏して建文の編年を補すこと、及び景清等陳廸・黃觀・黃鉞・王良鉄鉉・練子寧・陳思賢なりを贈卹するを請う（『罪惟録』帝紀卷之十六・熹宗哲皇帝）。

翌年の天啓四年（一六二四）三月二十七日には、歐陽調律（字は嶠谷，号は伯宣。四川合州の人（江西安福の人）。萬曆三十八年庚戌科（一六一〇）三甲九十八名の進士）が、つぎのようにいう。

〔天啓四年三月〕辛巳（二十七日）南京戸科給事中の歐陽調律 建文君の編年（年号）・廟祀を請いて〔以下のように〕言う。臣 南垣に備員たりて、數しば陵廟に趨り、東陵の爽として失うこと有るが若きを望むに及ぶ。夫れ建文太子の廟貌は宛然たり。歳に九祭す。而して建文 生まれながらにして帝王爲るも、歿して諡號無し、既に太廟に入祔するを得ず。又た別に一祠を享け、封墓（陵墓を増築する）さるるを得ず。魂魄 安くに依るかを識る莫し。二祖列宗 必ず安からざる有り。編年（年号）の一事に至りては、成祖の詔の中に原より位號を降削するの說無し。此れより前は祇だ承訛に屬す。今は即ち建文の年號を永樂の前に列するは、亦た嫌忌有り。而して強いて之を洪武の後に附せば、統系 明らかならず。廷議に敕して、毅然として舉行し一代の美を成すを乞う、と。許されず（『國權』卷八十六・五二七二頁・天啓四年三月辛巳（二十七日）条：天啓『實錄』同じ）。

建文帝は、生まれながらの帝王であつた。しかし、亡くなってからは、諡号がなく、祖廟にも合祀されない。また、単独で廟を立てたり、陵墓を増築されたりもされない。これでは、建文帝の魂魄はどこをよるべとするのだろうか。編年（年号）の革除については、永樂帝の詔にそうしたことはなかった。以前より間違いを受け継いできたのである。「建文」の年号を、「永樂」の年号の前に置けば、紛らわしくなり、「洪武」の後に附せば、流れがわからなくなる。そこで、臣下に詔して、「建文」を独立して取り扱うように願い出た。しかし、認めら

れなかった、という。

なお、『明史』の建文の時の殉節の臣を集めた列傳第三十一の末・賛の直前に、つぎのようにある。

萬曆の時に及び、江南に又た『致身録』有り。之を茅山の道書の中に得と云う。建文の時の侍書の呉江の史仲彬の述ぶる所なり。[建文]^①帝の出亡後の事を紀して甚だ具われり。[史] 仲彬・程濟・葉希賢・牛景先は皆な亡_にぐるに従うの臣なり。又た廖平・金焦の諸姓名有り、而して雪菴和尚・補鍋匠等は、具に姓名・官爵有り。一時の士大夫 皆な之を信ず。給事中の歐陽調律 其の書を朝に上つり、爲に諡を請い祠を立てんと欲す。然れども考うるに[史] 仲彬 實に未だ嘗て侍書と爲らず。『[致身] 録』は、蓋し晚出にして、附會し信ずるに足らず（『明史』卷一百四十三・列傳第三十一）。

① 清代になって、帝号が復活する。

建文帝が出亡してから後のことを記録した偽書『致身録』が、萬曆年間に現れた。当時の読書人はこの内容を信じた。歐陽調律が、その書を朝廷に奉り、建文帝のために諡を贈って廟を建てるように請願した、という。

天啓『實錄』には、『致身録』のことは記されていないが、諡号と廟については言及されているので、『明史』のこの記述は、天啓四年三月二十七日のことを指しているのかもしれない。『致身録』については後にのべる。

さらに、『國榷』の天啓七年十二月十四日条には、つぎのようにいう。

[天啓七年十二月丁未（十四日）] 故建文の臣の練子寧の裔孫の一奎 奏して恩卹を求む。部に下して其の官を復す（『國榷』卷八十八・五四〇七頁・天啓七年十二月丁未（十四日）条：天啓『實錄』同じ）。

永樂帝に批判された建文帝の臣に練子寧がいたが、その子孫の練一奎が、恩卹を求めた。その結果、その官位を復活させたというのである。

⑨崇禎年間

崇禎四年（一六三一）五月二十八日（崇禎『實錄』卷之四「崇禎四年春五月壬寅」条による）に、李若愚（字は知白，号は愚公。湖廣漢陽の人。萬曆四十七年己未科（一六一九）三甲二十八名の進士）は、建文帝の廟号を決めることと、当時の殉節の臣を記録することを願い出た。しかし、この提案は禮部に送られたものの、そのままになってしまう。

是の月（崇禎四年五月）、工部郎中の李若愚 建文帝の廟號を復し、殉節の諸臣を錄せんことを請う。章 禮部に下る（『國權』卷九十一・五五六四頁・「思宗崇禎四年五月」条：崇禎『實錄』同じ。ただし、日付を二十八日に掛ける）。

さらに、崇禎十五年（一六四二）十月二十五日には、鞏永固が、建文帝に諡号を贈るよう請願した。

〔崇禎十五年十月壬戌（二十五日）〕駙馬都尉の鞏永〔固〕 建文君の諡號を請わんことを圖る。部科議に下すも、果して行なわれず（『國權』卷九十八・五九四五頁・「思宗崇禎十五年十月壬戌」条：崇禎『實錄』同じ）。議論されたが、実行されなかったというのである。

このことについて李清（字は心水，号は映碧，晩年は天一居士と号す。揚州興化の人。明・萬曆三十年〔一六〇二〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。崇禎四年辛未科〔一六三一〕三甲一百八十六名の進士）は、その『三垣筆記』のなかでも詳しく述べている。それによると、鞏永固が、建文帝に諡号を贈るよう請願した。そこで崇禎帝は、大臣と議論すると、やはり諡号を贈るように薦められた。さらに、吳甡（直隸興化の人。萬曆四十一年癸丑科（一六一三）の三甲七十八名の進士）が、建文帝には過失がなかった、と奏上する。すると、崇禎帝は、そうではない、建文帝はそれまでの制度を変更し、親藩を弾圧した。これらすべてが誤りであった、いう。さらに、諡号はこれまでの皇帝がまだ着手したことがないことであり、私（崇禎帝）が行なうべきだろうか、とした。ただ、しばらくして、つまりは一家のことである、といった。ただ軍事に迫わ

れることになり、とうとう沙汰やみになった、という。

鞏駙馬永固光宗の嫡、順天の人。上疏して建文の諡を補せんことを請う。上（崇禎帝） 諸々の輔臣と議すに、皆な^{すすめる}慫慂す。呉甡 更に奏して曰く、「建文 過り無し」と。上（崇禎帝） 曰く、「然らず。渠れ祖制を變じ、親藩を戕う。皆な過ちなり」と。又た曰く、「此の事は列聖皆な未だ行なわず、朕 行なう可きや否や」と。既にして曰く、「畢竟するに是れ一家なり」と。兵事の迫るに會し、遂に已む（『三垣筆記』附識上 崇禎）。

また、『明史』では、つぎのようにいう。

樂安公主、鞏永固に下嫁す。〔鞏〕永固、字は洪圖、宛平の人。讀書を好み、才氣を負う……又た建文皇帝の廟號を復さんことを請う。事 未だ行なわれずと雖も、時論 ^{よし} 韙とす……（『明史』卷一百二十一・列傳第九・樂安公主）。

（つづく）